

病弱養護学校における学校教育目標の 構造と形式に関する研究

河合 康* 大野 由三**

(平成6年10月31日受理)

要 旨

本研究では、全国の82校の病弱養護学校を対象にして、学校要覧の恵贈を依頼し、そこに記されている学校教育目標の構造と形式を分析した。81校からの協力が得られ、その内2校は学校教育目標が記されていないため研究対象から外し、合計79校について分析を行った。分析の視点は、①名称、②位置づけ、③目標達成のための方針記述、④障害に関する用語、⑤表現形式、⑥下位の目標等の設定、であった。

全体的にみて、学校教育目標の構造や形式は学校により様々であること、学校教育目標の重要性が十分に認識されているとはいえない状況があること、学校教育目標とその他の用語の概念規定や、両者の関連性が不明確であったり、混同されている傾向があること、が明らかにされた。こうした傾向は、精神薄弱養護学校、肢体不自由養護学校とほぼ同様であった。

今後の病弱養護学校の学校教育目標の方向性としては、「教育目標」ではなく、学校の教育目標であることを明確にした名称を用い、学校教育目標を達成するための方針を明記すべきであることが指摘された。また、学校教育目標を上位概念として位置づけ、学校教育目標を核にし、かつ、学校教育目標との関連性を踏まえて、学校教育活動に関わる用語や事項の整理を行うべきであることが示唆された。

KEY WORDS

educational objectives of schools	学校教育目標
schools for the health impaired	病弱養護学校
structure 構造	form 形式

I. 問題及び目的

全国病弱虚弱教育研究連盟調査によると、平成5年5月1日現在、病弱教育対象児の疾患の占める割合は、呼吸器疾患が1番多く18.2%、次いで精神・神経疾患(16.4%)、腎臓疾患(11.4%)、筋ジストロフィー症(10.0%)、脳性まひ(8.4%)、身体虚弱・肥満(8.7%)、その他(7.3%)の順となっている¹⁾。現在は、気管支喘息などの呼吸器疾患や腎臓疾患といった慢性疾患が病弱教育の主な対象といえ、こうした子どものなかには、病状の回復に伴い、原籍

* 障害児教育講座

** 障害児教育実践センター

校に復帰する子どももいる。その一方で、進行性筋ジストロフィー症の子どもたちは、最終的には死に至るという極めて過酷な状況におかれており、全く対照的である。さらに、最近、病弱養護学校において急激に増加しているのが2番目に多い精神・神経疾患であるが、この範疇に入るのがいわゆる不登校と呼ばれる子どもたちである。また、単一のカテゴリーに分類することが困難な「その他」に該当する子どもの割合が比較的多いのも特徴的である。このように、昨今の病弱養護学校では、在籍児童生徒の多様化が進行しているのが実情である。

このような、子どもの実態の多様化に対応するために、多くの病弱養護学校では、教育課程の類型化を行い、各障害に対応した指導を行っている。しかし、個々の教師がバラバラに教育活動を展開していたのでは、学校という組織としての存在意義がなくなる。なぜならば、教職員が、それぞれの活動のなかで、実現に努力すべき共通の目標があって初めて、学校が生きてくる²⁾からである。

では、この教職員の共通の目標となるものは一体何なのであろうか。これがいわゆる学校教育目標である。この学校教育目標とは、その学校として教職員の活動をひきしめ、方向づけをし、まとまった活動にしていくための核になるもの³⁾であり、それ故、学校教育において必要不可欠なものであるといえる。

上述の通り、病弱養護学校では、児童生徒の障害の多様化が進行しており、さらには、幼稚園、小学部、中学部、高等部が併設されているところが多いため、対象とする児童生徒の年齢の幅が広い。こうした点を考慮すると、学校の進むべき方向性を示す学校教育目標は、通常の学校以上に、また、他の特殊教育諸学校以上に、重要であるといえる。しかしながら、これまでのところ、精神薄弱養護学校と肢体不自由養護学校における学校教育目標に関する研究⁴⁾はみられるものの、病弱養護学校における研究は全くなされていない。

そこで、本研究では、病弱養護学校における学校教育目標の重要性を考慮に入れ、今後、病弱養護学校における学校教育目標の方向性を検討するための第一段階として、学校教育目標の構造と形式に焦点を当てて考察することを目的とした。その際、必要に応じて、精神薄弱養護学校、肢体不自由養護学校との比較も加えることにした⁵⁾。

II. 方 法

1. 調査対象及び方法

全国の病弱養護学校82校を対象に、平成6年8月から9月にかけて郵送法により、学校要覧(平成6年度)の恵贈を依頼した。

2. 回収状況

81校から学校要覧もしくはそれに準ずる文書を収集した。回収率は98.8%であった。

3. 分析方法と視点

回収された学校要覧のうち、今回の分析対象である「学校教育目標」が記されていない2校を分析の対象から外し、合計79校(有効回収率96.3%)の病弱養護学校の学校教育目標について、以下の視点から分析を行った。分析の視点は、河合・大野の先行研究⁶⁾を参考にした。

- 1) 学校教育目標の名称
- 2) 学校教育目標の位置づけ
- 3) 学校教育目標を達成するための方針の記述
- 4) 学校教育目標における障害に関する用語
- 5) 学校教育目標の表現形式
- 6) 下位の目標等の設定状況
 - ①年度の目標, ②部別の目標, ③領域別の目標, ④病類別の目標, ⑤校訓

III. 結果及び考察

1. 学校教育目標の名称

Table 1は、学校要覧において、学校教育目標がどのような名称で用いられているのかを示したものである。

「教育目標」という表現を用いている学校が56校と最も多く、全体の70.9%を占めていた。学校の目標という点を意識した記述、すなわち「学校教育目標」、「本校の教育目標」、「学校の教育目標」などが使用されている学校は全部で21校(26.6%)と約4分の1に留まっていた。

一般に「教育目標」とは、「学校教育目標」よりも広義であり、より包括的、抽象的な内容となるものである。つまり、「教育目標」とは理念目標ともいべきものであり、学校教育法や学習指導要領などに示されている病弱教育のねらいそのものを指すものである。これに対して学校教育目標とは、国や地方の教育行政機関の示す教育目標の焼き直しではなく、教育実施に責任を持つ学校の教育に対する姿勢を示すものであり、学校の自主性によって決められなければならないものである。具体的には、学校教育目標は、病弱教育一般の教育目標を踏まえた上で、児童生徒の心身の障害の状態や特性、教育的な環境、地域住民の教育的関心や期待などを十分に考慮して、その学校独自のものが設定されなければならない⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾のである。

こうした点を考慮すると、今後は単なる「教育目標」ではなく、学校の教育目標であることを明確に示した名称を用いるべきであると考えられる。確かに、「教育目標」という用語の中に「本校における」という意味が含まれているという解釈も可能かもしれないが、学校教育目標の意味を限定的に捉えるためにも、学校の教育目標であることを明確にした名称を用いた方がよいといえよう。なぜならば、このことが、学校教育目標の要件の一つである独自性¹¹⁾に対する意識を高め、ひいては、内容そのものへの吟味につながることを期待できるからである。

こうした点を考慮すると、今後は単なる「教育目標」ではなく、学校の教育目標であることを明確に示した名称を用いるべきであると考えられる。確かに、「教育目標」という用語の中に「本校における」という意味が含まれているという解釈も可能かもしれないが、学校教育目標の意味を限定的に捉えるためにも、学校の教育目標であることを明確にした名称を用いた方がよいといえよう。なぜならば、このことが、学校教育目標の要件の一つである独自性¹¹⁾に対する意識を高め、ひいては、内容そのものへの吟味につながることを期待できるからである。

なお、「教育の目あて」、「指導目標」、など、それ以外の名称を用いている場合もみられ、「学校教育目標」という概念が定着していない学校も存在することが認められた。

Table 1 学校教育目標の名称

名 称	学校数	(%)
教育目標	56	70.9
学校教育目標	6	7.6
本校の教育目標	9	11.4
学校の教育目標	4	5.1
本校教育目標	1	1.3
本校教育の目的	1	1.3
教育の目あて	1	1.3
指導目標	1	1.3
計	79	100.0

最後に、今回の結果を、精神薄弱養護学校と肢体不自由養護学校の場合と比べてみると、ほぼ同様な傾向が認められた。精神薄弱養護学校では、「教育目標」という用語を用いている学校が76.8%、肢体不自由養護学校では72.3%となっており、病弱養護学校と同様に7割を越えていた。養護学校全体からみても、「学校教育目標」という概念が定着していない傾向にあることが察知された。

2. 「学校教育目標」の位置づけ

ここでは、学校要覧の目次の構成からみて、学校教育目標が大項目となっている場合を上位概念とし、その下の概念となっている場合を下位概念と呼称することにする。

学校教育目標を上位概念として位置づけている学校は41校(51.9%)と過半数を占め、下位概念となっている学校は38校(48.1%)となっていた。約半数の学校が、学校教育目標を下位概念として設定しており、学校教育目標が十分に重視されているとはいえない状況にあることが看取された。

次に、学校教育目標を下位概念として位置づけている38校が、上位概念としてどのような名称を用いているのかをTable 2からみてみると、「教育計画」が10校と一番多く、次いで「教育課程」、「学校運営」が4校、「学校運営方針」、「学校運営」、「教育方針」が各3校の順となっている。その他にも、Table 2に示すように、学校教育目標の上位概念にあたる名称が学校によって様々に用いられていた。

今回の結果で多数を占めている「教育計画」とは、本来、学校教育目標を達成するための手段として設定されるべきものであり、それ故、教育計画が上位概念になるのは適切とはいえない。つまり、教育計画には明確な教育目標が必要なのであり¹²⁾、「学校教育目標の設定」→「教育計画の設定」という順番になるのが妥当である。

また、2番目に多い「教育課程」も適切ではない。なぜならば、学校教育目標は、教育課程の根幹となるものであり、教育課程に統一を与え、その実践の方向を明示する¹³⁾ものだからである。すなわち、学校教育目標が設定されて初めて、教育課程の編成が行われるのであり、決してその逆であってはならない¹⁴⁾のである。

さらに、「学校経営」という単語を含んだ用語を上位概念として用いている学校が全部で8校も存在しているという点も問題点であろう。なぜならば、学校経営という概念は、個々の学校が、その教育目標を効果的に達成するために必要な組織づくりを行い、これを能率的に運営する営みを意味する¹⁵⁾¹⁶⁾からである。学校経営という概念は、学校教育目標に規定されてはじめて

Table 2 学校教育目標の上位概念の名称

上位概念の名称	学校数
教育計画	10
教育課程	4
学校運営	4
学校運営方針	3
学校経営	3
教育方針	3
学校経営方針	2
学校経営概要	1
学校経営の概要	1
学校経営の重点等	1
経営の方針	1
本校の教育方針	1
教育の概要	1
学校の概要	1
本校の教育	1
子どもへの願い	1
	38

意味をもってくる¹⁷⁾のである。

このように学校教育目標が下位に位置づけられ、その他の概念の中に包摂、吸収されてしまっている学校教育目標の構造については今後改善を検討する必要がある。なぜならば、学校教育目標とは、国家レベルにおける憲法や教育基本法のように、学校レベルにおける経営全般に指標を与え、教育課程の編成と実施に際しての基本方針を与える役割を果たさなくてはならない¹⁸⁾からである。

3. 学校教育目標を達成するための方針の記述

ここでは、学校教育目標を達成するための方針が設定されているか否かを分析してみた。何らかの方針を明記してある学校は46校(58.2%)であり、残りの33校(41.8%)は学校教育目標だけしか記述していなかった。教育目標が明確にされると、次にそれを実現するための合理的な方針を定めなければならない¹⁹⁾にもかかわらず、4割以上の学校が方針を記していないというのは問題点として指摘できよう。学校教育目標の焦点的な問題は、内容そのものよりもその具現化の方策にある²⁰⁾と指摘されているが、方針が欠落している形式はまさにこうした傾向の表れであるといえよう。

なお、精神薄弱養護学校、肢体不自由養護学校の場合をみても、それぞれ、36.2%、41.8%の学校が学校教育目標を達成するための方針を記しておらず、今回の病弱養護学校と同様な傾向が認められた。

次に、Table 3から、方針を設定している46校が、方針の名称としていかなる用語を用いているのかをみとめることにする。最も多いのは「教育方針」で16校であり、続いて、「経営方針」が7校、「学校経営の方針」、「学校の教育目標を達成するための基本方針」が4校、「学校経営方針」が3校の順になっていた。「経営」という用語を含んだ名称を用いている学校が全体で18校みられ、方針の名称としては、「教育方針」か「経営方針」が一般的であるといえる。しかし、Table 3からもわかるように、その他にも様々な方針が設けられていた。

ところで、学校教育目標を達成するための方針であることをはっきりと明記した名称を用いている学校が少ないながらも5校みられていることは注目に値するといえよう。なぜならば、実際には学校教育目標を達成するための方針であるにもかかわらず、名称が「教育方針」や「経営方針」などと記されていると、一般の教職員には、方針と学校教育目標との関連が明確に把握されていない場合もあると思われるからである。今後は、学校教育

Table 3 方針の名称

方針の名称	学校数
教育方針	16
学校経営方針	3
学校経営の方針	4
学校経営の基本方針	1
学校経営の具体的方針	1
経営方針	7
経営の方針	1
経営基本方針	1
学校の教育目標を達成するための基本方針	4
教育目標達成のための方針	1
基本方針	1
教育課程編成の方針	2
指導の方針	1
指導方針	2
方針	1
計	46

目標を達成するための方針であることが明確にわかるような方針の名称を検討してもよいのではないかと思われる。

4. 障害に関する用語

ここでは、学校教育目標の中に、病弱養護学校の目標であることが察知されるような用語が用いられているか否かについて分析してみた。具体的には、「病弱」、「病気」、「身体虚弱」、「病状」、「病類」、「喘息」、「腎臓病」等の用語が用いられており、一目で病弱養護学校の学校教育目標であることが明かな形式をⅠ型とした。また、「心身の障害」や「障害」などの用語は用いられており、障害児教育における学校教育目標であることは察知されるが、病弱養護学校の学校教育目標であることが判然としない場合をⅡ型とした。さらに、障害に関係する用語が全く用いられていない形式をⅢ型としてみた。

その結果、Ⅰ型が最も多く48校(60.8%)であり、次いでⅡ型が24校(30.4%)、Ⅲ型が7校(8.9%)となっていた。

この結果を、肢体不自由養護学校の場合と比べてみると、多少の違いがみられる。肢体不自由養護学校では、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型に相当する学校の割合が、それぞれ、27.7%、56.7%、15.6%であり、Ⅱ型が過半数を占めていた。病弱養護学校においては、肢体不自由養護学校に比べて、病気や障害に起因する特殊性を考慮した目標記述がなされている傾向が伺われた。その一方で、Ⅱ型とⅢ型を合わせると39.2%と、ほぼ4割に達しており、障害が多様化していく病弱養護学校においては、児童生徒のすべてに当てはまるような内容にしようとした場合、病弱教育の目標から障害児教育の目標へ、さらには教育一般の目標へと移行せざるをえない状況にあることも推察された。

5. 学校教育目標の表現形式

Table 4に示すように、学校教育目標の表現形式を、文章型、簡条型、併用型に分類してみた。さらに、文章型は、1型(短文型)と2型(長文型)に、簡条型は、3型(短文簡条型)、4型(長文簡条型)に細分化してみた。1型(短文型)とは、「強い意志と豊かな情操を身につけた人間に育てる」というように1行の短い文章の形式であり、2型(文章長文型)とは、「児童生徒の病気、心身の障害の状態、能力、特性に応じた指導を通して、一人一人の能力を最大

Table 4 学校教育目標の表現形式の型

文章型	1型(短文型)：1行の短文で表されている形式
	2型(長文型)：2行以上にわたる長い文章でまとめられている形式
簡条型	3型(短文簡条型)：1行の短文が簡条書きされている形式
	4型(長文簡条型)：2行以上にわたる長文が簡条書きされている形式
併用型	1型～4型を組み合わせた形式

限にのぼし、可能な限り社会参加・自立の達成をめざす」のように2行以上に亙る長い文章で記す形式である。3型(短文箇条型)とは、「心身の調和的発達の基盤を培う。自主、独立の精神を育てる。豊かな人間形成を図る。」のように短い文章を並記する形式である。4型(長文箇条型)とは、2行以上の文章を2つ以上箇条型で記すものである。併用型とは、1型～4型を組み合わせる形式である。

全体的にみると、Table 5に示すように、併用型が41校(51.9%)、文章型が29校(36.7%)、箇条型が9校(11.4%)となっており、併用型を採用する学校が過半数を占めていることがわかる。さらに細かくみてみると、2型が26校と最も多く、次いで2+3型が23校となっており、以下、3型と2+4型が7校、1型が3校、4型、1+3型、2+1型が各2校の順になっている。このように、学校教育目標の表現形式は多様であることがわかる。

さらに各々の型について、目標の記述対象が子どもであるのか、教師であるのかについて分析してみた。具体的には、「……を獲得する」、「……ができる」、「……する子」といった表現を

Table 5 学校教育目標の表現形式

形式		対象	学校数	計	(%)
文章型 (29校)	1型	子ども	2	3	3.8
		教師	1		
	2型	教師	26	26	32.9
箇条型 (9校)	3型	子ども	4	7	8.9
		教師	3		
	4型	教師	2	2	2.5
併用型 (41校)	2+3	教師+教師	1	23	29.1
		教師+子ども	19		
		教師+子ども・学校	1		
		教師+両者	1		
		不明+教師	1		
	2+4	教師+教師	7	7	8.9
	1+3	教師+子ども	2	2	2.5
		教師+子ども	2	2	2.5
	1+2+3	子ども+教師+両者	1	1	1.3
	1+4	教師+教師	1	1	1.3
3+1	子ども+教師	1	1	1.3	
3+3	教師+子ども	1	1	1.3	
3+4	子ども+教師	1	1	1.3	
4+2	教師+子ども	1	1	1.3	
4+3	教師+子ども	1	1	1.3	
計			79	79	100.0

子ども対象とし、「……を促す」、「……を育てる」、「……を図る」などの表記を教師対象とした。また、子どもと教師対象を別々に設定している場合は両者とし、どちらを対象にしているのか判然としない場合は不明とした。

Table 6より、2型の26校の対象はすべて教師であることがわかる。また、2番目に多い2+1型の23校も、1校を除いてすべて、長文型の対象は教師となっている。両者をあわせると48校となり、全体の60.1%が教師対象の長文形式を採用していることがわかる。一方、短文簡条型である3型の半数以上が子ども対象になっており、また、2+3型の23校のうち21校が子ども対象の短文簡条形式を採っている。このことより、長文形式の場合は、学校教育目標を子どもに理解してもらうというよりは、教師対象の記述形式になっており、短文簡条型の場合は、望ましい子ども像が描かれていて子どもにも理解されやすい記述になっているという傾向が伺われた。

全体的にみると、教師対象の長文形式か、もしくは教師対象の長文形式に子ども向けの簡条形式を付加するかたちが合わせて49校(62.0%)となっており、この両者が、病弱養護学校の学校教育目標の特徴として一般的であることが明らかにされた。しかし、今回の結果は、通常の小・中学校の傾向²¹⁾とは対照的であった。通常の小・中学校の場合、学校教育目標は「子ども像」をもって描くことが圧倒的に多く、文章型の学校は小学校では2.8%、中学校では2.3%と極めて少なくなっているのである。このことより、病弱養護学校の学校教育目標は、子どもに理解してもらうというよりは、教師の認識を促すような形式になっている傾向が強いといえる。

なお、病弱養護学校において文章型が多いという傾向は、精神薄弱養護学校、肢体不自由養護学校の学校教育目標においても同様に認められていた。

6. 下位の目標等の設定状況

最後に、Table 6より、学校教育目標に続く下位目標の設定状況を試みることにする。

①年度の目標

学校教育目標が設定されると、次に、学校教育目標にもとづいて年度ごとの指導の重点が明確にされ、全職員の共通理解、確認のもとに実践に移されなければならない²²⁾。そこで、年度目標、重点目標、努力目標などのかたちで、学校教育目標を受けた年度ごとの目標が設定されているか否かを分析してみたところ、63校(79.7%)と8割近い学校が年度の目標を設定していた。学校教育目標はその性格上、単一年度ではなく、長期的な見通しをもって達成されるべきものであり、そのためには、年度ごとの重点目標を掲げて、段階的に積み上げていく必要がある。その意味からすると、多くの学校において、年度の目標が設定されているのは望ましい傾向であるといえる。教職員の構成が毎年変わることを考慮してみても、教職員の意志の統一を図る上で、年度の目標は必要不可欠であると思われる。

Table 6 下位の目標等の設定状況 [学校数(%)]

	部 別	年度別	領域別	病類別	校 訓
有	32(40.5)	63(79.7)	25(31.6)	15(19.0)	21(26.6)
無	47(59.5)	16(20.3)	54(68.4)	64(81.0)	58(73.4)
計			79 (100.0%)		

②部別の目標

部別の目標を掲げている学校は32校（40.5%）のみであり、6割近くの学校において部別の目標が設定されていなかった。学校教育目標が掲げられたとしても、それが実際に子どもの指導に生かされるためには、より細かな部別の目標が必要である。その意味からすれば、約半数の学校が部別の目標を設定していないのは問題点として指摘できよう。

また、部別の目標が記されている学校でも、ほとんどが、学校教育目標とは遊離した形で部の目標が設定されている傾向が強かった。

ここで、学校教育目標と部の目標との整合性が認められる事例をみてみよう。Table 7の事例では、学校教育目標において記されている4つの児童生徒像に対応させたかたちで、各部の目標が設定されており、望ましい形式であるといえよう。しかし、このように、学校教育目標と部の目標との関連性が察知される形式で記していたり、両者の目標の関連性を図示している学校は5校のみであった。部の目標の設定に際しては、学校教育目標を念頭におく必要があるといえよう。

Table 7 学校教育目標と部の目標の関連性が認められる形式

児童生徒像 本校のめざす	静かに深く考える子	みんな仲よく助け合う子	素直で明るく生きぬく子	くじけずねばり強くやりぬく子
児童像 小学部の	創造性豊かに深く考える子	相手の立場を理解し助け合う子	生き生きと意欲的に活動する子	障害に負けず目標にむかって意欲的に取り組む子
生徒像 中学部の	意欲的に学習するとともにすじ道を立て思考する子	お互いに理解し合い支え合う子	未来をみつめ素直に明るく生きぬく子	自己の障害に負けず何事にもくじけず努力する子
生徒像 高等部の	意欲的に学習し深い思慮と正しい判断力をもつ子	自他敬愛の精神を持ち、お互いに助け合いながら成長する子	個性を伸ばし、希望をもって、明るく、強く生きぬく子	障害を克服し、目標にむかってねばり強く実践する子
児童生徒像 訪問教育部の	自分の気持ちを、身ぶりや態度で表現する子	仲間と一緒に楽しく過ごす子	毎日を元気いっぱい生きる子	持っている力を精いっぱい発揮する子

③領域別の目標

学校教育目標が実際の授業で具体化されるためには、教育課程の各編成領域や指導形態において、学校教育目標や各部の目標を受けた形式で目標が設定される必要がある。Table 6からわかるように、各教科、道徳、特別活動、養護・訓練等についての目標が個々に明記されている学校は25校（31.6%）と極めて少なく3割程度である。確かに、実際の授業場面では各教師がそれぞれ目標を設定して、教育活動を展開しているかもしれない。しかし、組織体としての学校が統一した形で目標実現に向けて努力するためには、領域別の目標も明文化して設定する

必要があるといえよう。

④病類別の目標

「慢性疾患児対象」、「筋疾患児対象」、「重度・重複障害児対象」、「不登校児対象」といったように病類別の目標が設定されているか否かをみってみると、こうした目標を明記してある学校は、15校（19.0%）と極めて少なかった。確かに、教育課程の類型化を行っている病弱養護学校が多いことを考えれば、実際には各類型ごとの目標が設定されているのかもしれない。しかし、近年の病弱養護学校における児童生徒の多様化の実態を考慮すると、部別の目標や領域別の目標以上に病類別の目標が必要ではないかと思われる。しかも、それは、個々の目標がばらばらに設定されるのではなく、学校教育目標との関連性を保持していなければならない。この点に関して、参考になる事例があるので示してみたい。

Table 8 に示す学校では、学校教育目標で記された3つの児童生徒像に明確に対応した病類別の目標が定められていることがわかる。そして、それぞれにおいて、発達段階に応じて5段階に目標が設定されているところに特徴があるといえる。たとえ、年度別、部別、領域別の目標が設定されたとしても、多様化する個々の児童生徒の実態に対応できなければ、学校教育目標の具現化は難しいと思われる。その意味からすると、Table 8 の事例は、一人ひとりの個性に応じて目標が設定され、さらに、次の到達段階や目指すべき目標が記されており、参考にすべき点が多いといえよう。

⑤校訓の設定

学校教育目標に類似するものとして「自律 協力 感謝」といった形式で表される校訓があるが、校訓が設定されている学校は26校に留まっていた。

この校訓は、戦前において、教育勅語に根拠をもち、上から下に向かって発せられる絶対的な「訓え」であった²³⁾ため、戦後、中央集権的、管理的であるなどの批判や反対があり、校訓そのものを否定的にとらえる²⁴⁾見方が強まっていった。こうした教育界一般の思潮を背景にしているため、病弱養護学校においても校訓を設定している学校が少ないのではないかと推察される。

その一方で、校訓にもそれなりの設定意義があるといえる。なぜならば、校訓は、学校教育目標を日常の教育活動に生かすために端的にしかも標語的に表現したもの²⁵⁾であり、学校教育目標を補完する機能を有するものであるからである。しかし、ここで問題になるのは、校訓が本当に学校教育目標を補完する役割を担っているかどうかという点である。校訓を設定していた22校を分析してみると、13校と半数以上の学校において、学校教育目標に先行するかたちで校訓が設定され、学校教育目標よりも優位な位置づけに置かれており、本来の機能を果たしているとはいえない状況にあった。校訓の設定に際しては、学校教育目標との関連性や違いを十分に認識する必要があるといえよう。

IV. お わ り に

全体的にみて、病弱養護学校における学校教育目標の位置づけや形式は学校により様々であり、学校教育目標に対する認識や把握の多様性が認められた。また、構造や形式上からみると、学校教育目標の重要性が十分に認識されているとはいえない状況も推察された。さらに、学校

Table 8 学校教育目標と病類別の目標に関連性が認められる形式

〈学校教育目標〉

児童生徒が、自己の病気や障害の克服にたくましく努めながら、互いにやさしく思いやり、共に支え合い、人間尊重の態度・習慣に励み、明るく積極的に自己実現を進める健康な人格者として成長するようその育成を図る。

- ア 明るく たくましい 児童生徒
- イ よく考え 自分から行う 児童生徒
- ウ なかよく 思いやりのある 児童生徒

	明るく たくましい児童生徒	よく考え 自分から行う児童生徒	なかよく 思いやりのある児童生徒
	慢 性 疾 患		
I	自分の病状をいえる子	自分の気持ちをいえて、身のまわりのことは自分でする子	明るくあいさつし、友だちとなかよく遊ぶ子
II	病気をなおそうとする子	物を大切にし、きまりや約束を守る子	相手の気持ちを考えて接する子
III	病状にあわせて生活する子	正しいと思ったことや自分で決めたことを最後まで行う子	相手の立場や意見を大切にしながら互いに助け合う子
IV	健康回復につとめ、計画的に生活する子	自分の行動に責任を持つ子	色々な人と接し、自分と違う考え方や、生き方をしている人から生き方を学ぶ子
V	自分の適性を理解し、真理を尊び、正義を求め、主体的に生きる子	働くことの意義や尊さを知り、自発的、積極的に行動する子	集団における役割と責任を知り、他人に対しては理解と節度をもって接する子
	慢 性 疾 患 重 複		
I	体調が悪いとき態度であらわす子	教師と一緒に身のまわりをかたづけようとする子	あいさつに答えようとしたり、みんなの中に入ろうとする子
II	体調や病状を聞かれたら答えようとする子	教師と一緒に身のまわりをかたづける子	あいさつに答え、さそわれた友達と遊ぶ子
III	体調や病状を訴える子	ひとりでしごとをしようとする子	元気にあいさつし、友だちとなかよく遊ぶ子
IV	自分の病状にあった学習や生活をする子	自分でできることはすすんで行う子	すすんであいさつし、自分から友だちとなかよくする子
V	すすんで健康回復に努めようとする子	自分の役割を最後までやりとおす子	だれにでも元気にあいさつし、感謝の気持ちをあらわす子
	筋 萎 縮 性 等 疾 患		
I	自分の体調をいえる子	自分の気持ちをあらわす子	身近な人に明るくあいさつする子
II	自分でできることを努力する子	自分の考えをすすんで発表する子	相手の気持ちを考えて接する子
III	体調にあわせて生活する子	自分の考えを持って行動する子	相手の立場や意見を大切にしながら互いに助け合う子
IV	すすんで健康維持につとめる子	必要なことやよいと思ったことにねばり強くとりむ子	色々な人と接し、自分と違う考え方や、生き方をしている人から生き方を学ぶ子
V	目標を持って計画的に健康維持につとめる子	生きがいを見出し、充実した生活を創造する子	感謝の気持ちで相手に接し、支え合いながら自分の役割と責任をはたす子
	筋 萎 縮 性 等 疾 患 重 複		
I	体調が悪いとき態度であらわす子	教師と一緒に身のまわりをかたづけようとする子	あいさつに笑顔で答え、みんなの中に入ろうとする子
II	体調を聞かれたら答えようとする子	教師と一緒に身のまわりをかたづける子	声を出してあいさつし、友だちと遊ぶ子
III	体調を聞かれたら答える子	ひとりでしごとをしようとする子	大きな声であいさつし、友だちとなかよく遊ぶ子
IV	体調や病状を訴える子	すすんでしごとをする子	大きな声ではっきり話し、すすんで友だちとなかよくする子
V	訓練にはげむ子	自分からすすんでしごとをやりとおす子	自分の言いたいことや感謝の気持ちを相手につたわるようにあらわす子
	重 症 心 身 障 害		
I	刺激に反応しようとする子	動かしてもらうことをよろこぶ子	スキンシップをよろこぶ子
II	刺激に対して快・不快をあらわす子	頭や手足を動かす子	まわりの人の動きなどに興味をしめす子
III	特定の刺激をよろこぶ子	腹ばいで頭をあげる子	みんなの遊びをみて楽しむ子
IV	すすんで快い刺激を求め、運動をおこす子	寝がえりをする子	援助を受けて、みんなと遊ぶ子
V	目的をもった動作をすすんでする子	自力で移動する子	みんなとなかよく遊ぶ子

教育目標とその他の用語の概念規定や、両者の関連性が明確にされていなかったり、混同されている傾向がみられ、学校教育活動を支える各概念が十分に吟味されて使用されているとはいえない状況が認められた。こうした結果は、精神薄弱養護学校及び肢体不自由養護学校とほぼ同様な傾向であった。

本来は、学校教育目標を核として、それが各部の目標へ、さらには学年・学級の目標へとつながり、最終的には個々の児童生徒の目標へと系統的に下りていかなければならない。そのためには、まず第一に学校教育目標を上位概念として位置づけることが重要であり、次に、それを実現に移すための方針を明確にする必要があるといえよう。そして、学校教育目標を核にし、かつ、学校教育目標との関連性を踏まえて、下位の目標や学校教育活動に関わる用語や事項の整理を行う必要があると思われる。その意味において、Table 7とTable 8に示した事例は、病弱養護学校における一つのモデルを提起していると考えられる。今後は、こうしたモデルとなる事例の良い点を組み合わせた形式での学校教育目標の構造を検討していく必要があると思われる。

今回は、病弱養護学校の学校教育目標の構造と形式を中心に検討してきたが、もちろん、構造的に組織化されていても、そこに設定されている内容が適したものでなければ、学校教育目標の要件を備えているとはいえない。今後は、病弱養護学校の学校教育目標の内容の分析を並行して行い、今回の結果と合わせて、病弱養護学校の学校教育目標を総合的に考察していきたい。

注 及 び 文 献

- 1) 全国病弱虚弱教育研究連盟 「全国病弱虚弱教育施設一覧・全国病類調査表」 1993年 p. 37.
- 2) 小島弘道 「学校教育目標」 牧昌見・池沢正夫編『学校用語辞典』所収 ぎょうせい 1985年 pp.150-152.
- 3) 伊津野朋弘「学校教育目標はなぜ必要か」『初等教育資料』第435号 1983年 pp.2-6.
- 4) 精神薄弱養護学校, 肢体不自由養護学校における学校教育目標に関する実証的な研究としては以下のものが挙げられる。
 - ① 河合康・大野由三 「精神薄弱養護学校における学校教育目標に関する分析的研究—構造と形式に焦点を当てて—」『学校教育研究』第7号 1992年 pp.72-80.
 - ② 大野由三 「精神薄弱養護学校の学校教育目標に関する研究—学校長の意識を通じて—」 『上越教育大学研究紀要』第11巻第2号 1992年 pp.115-123.
 - ③ 大野由三・河合康 「肢体不自由養護学校の学校教育目標に関する研究—学校長の意識を通じて—」 『上越教育大学研究紀要』第13巻第2号 1994年 pp.231-241.
 - ④ 河合康・大野由三 「肢体不自由養護学校における学校教育目標の構造と形式に関する研究—学校要覧の分析を通して—」『特殊教育学研究』第32巻第4号 1995年 pp. 29-37.
- 5) 精神薄弱養護学校と肢体不自由養護学校の比較に際しては、4)の①, ④を参照した。
- 6) 前掲書4)の④

- 7) 小島弘道 「教育目標」 牧昌見・池沢正夫編『学校用語辞典』所収 ぎょうせい 1985年 pp.284-285.
- 8) 文部省 「特殊教育諸学校学習指導要領解説—養護学校（病弱教育）編—」 東洋館出版 1992年 p.55.
- 9) 吉本二郎・奥田真丈 「学校教育目標の性格」 奥田真丈・小林一也編『教育目標』 ぎょうせい 1980年 pp.29-41.
- 10) 上滝孝治郎・山村賢明・藤枝静正 「日本の学校教育目標」 ぎょうせい 1978年 p.44.
- 11) 藤枝静正 「目標と実践との有機的構造的な関連づけ」 『学校運営研究』第185号 1977年 pp.10-14.
- 12) 稲生勁吾 「教育計画」 海後宗臣・村上俊亮・細谷俊夫編 『教育経営事典』所収 帝国地方行政学会 1973年 pp.81-82.
- 13) 熱海則夫 「新教育課程実践上の課題」 『学習指導研修』第3巻第1号 1980年 p.26.
- 14) 吉本二郎 「学校教育目標」 天城勲・奥田真丈・吉本二郎編『現代教育用語辞典』 第一法規 1973年 pp.68-69.
- 15) 牧昌見 「学校経営」 牧昌見・池沢正夫編『学校用語辞典』所収 ぎょうせい 1985年 pp.153-154.
- 16) 椎名仁 「学年運営」 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典1』 第一法規 1990年 pp.416-418.
- 17) 前掲書10) p.46.
- 18) 瀬戸富永 「学校教育目標の具現化と小学校経営の課題」 『学校運営研究』第241号 1981年 pp.11-16.
- 19) 前掲書12)
- 20) 牧昌見 「学校教育目標の具体化について」 『教育展望』第29巻第10号 1983年 pp.31-36.
- 21) 沢井昭男 「学校教育目標に関する実証的研究」 『日本教育行政学会年報』第7号 1981年 pp.185-208.
- 22) 金城実 「学校教育目標の設定」 『沖縄県教育（研究）集録』第24号 1975年 p.57.
- 23) 大久保了平 「校訓・級訓」 牧昌見・池沢正夫編『学校用語辞典』所収 ぎょうせい 1985年 p.388.
- 24) 大石勝男 「校訓、級訓」 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典3』所収 第一法規 1990年 pp.117-118.
- 25) 前掲書23)

A Study of the Structure and Form of Educational Objectives of Schools for the Health Impaired

Yasushi KAWAI* and Yoshizo OHNO**

ABSTRACT

In order to analyze educational objectives of schools for the health impaired, we asked 82 schools to send a pamphlet of each school. 81 schools replied but two of them didn't describe their educational objectives. The educational objectives in the pamphlet of school were analyzed in respect of 1) name, 2) position, 3) policy to accomplish objectives, 4) description of disability, 5) form, and 6) establishment of lower objectives.

As a whole, it was found that the structure and form of educational objectives were very different at each school, that the importance of them wasn't fully recognized, and that the conception of them wasn't distinguished from or confused with other terms concerning educational activities. These tendency were similar to those of schools for the mentally retarded and the physically handicapped.

This study suggested that

- 1) The name should not be "educational objectives" but "educational objectives of schools" or a name which is characteristic of the school involved.
- 2) A policy should be established to realize educational objectives of schools.
- 3) Educational objectives of schools should be highly recognized.
- 4) Terms and matters concerning educational activities were reorganized on the basis of educational objectives of schools.

* Division of Special Education

** Demonstration and Research Center for the Handicapped